

# 「佐久系」土器敷炉の成立

小山 岳夫

東日本の弥生時代の炉は地床炉主体であるが、長野県は埋甕炉等の土器使用炉、石囲炉、両炉の折衷などがあり、その系統も多様である（図1）。

図2には弥生中期栗林2式新段階～3式紀元前1世紀ころの中部日本の炉分布の概略を取り纏めた。

この時期は長野市榎田産「緑色岩類製磨製石斧」が栗林式土器と共に日本海側は新潟～福井県、太平洋側は千葉～静岡県まで広域に拡散する。馬場伸一郎は、この現象について石器を基幹とする流通と交易の結果と解釈する（馬場伸一郎2009『磨製石斧の流通と交易』『中部の弥生時代研究』）。

下伊那・上伊那・松本南部で主体を占める埋甕炉が佐久、長野南部でも少数見られる。炉と石器の分布を重ねて見ると磨製石斧を中心とする流通・交易の結果、中南信の人々が東北信へ動いた結果と見ることもできる。

いずれにしても弥生中期に中南信から佐久へ齎された埋甕炉は地域的変容を遂げ、後に佐久北部で大流行する固有の「佐久系」土器敷炉が誕生する。

弥生後期「箱清水式」土器様式圏にあって強い地域性を発揮した佐久カラーの嚆矢をなす事象である。

詳しくは本会誌155号の拙稿を参照されたい。

系統	形態		
普通系	地床炉	地床炉+縁石	地床炉+土器立
南信系	埋甕炉	埋甕炉+縁石	埋甕炉+土器立
中部系	「L」字状石囲炉	「コ」字状石囲炉	「口」字状石囲炉
佐久系	土器敷炉	土器敷炉+縁石	土器敷炉+土器立
折衷系	石囲土器敷炉	石囲埋甕炉	石囲埋甕炉

図1 炉の分類（一部略）

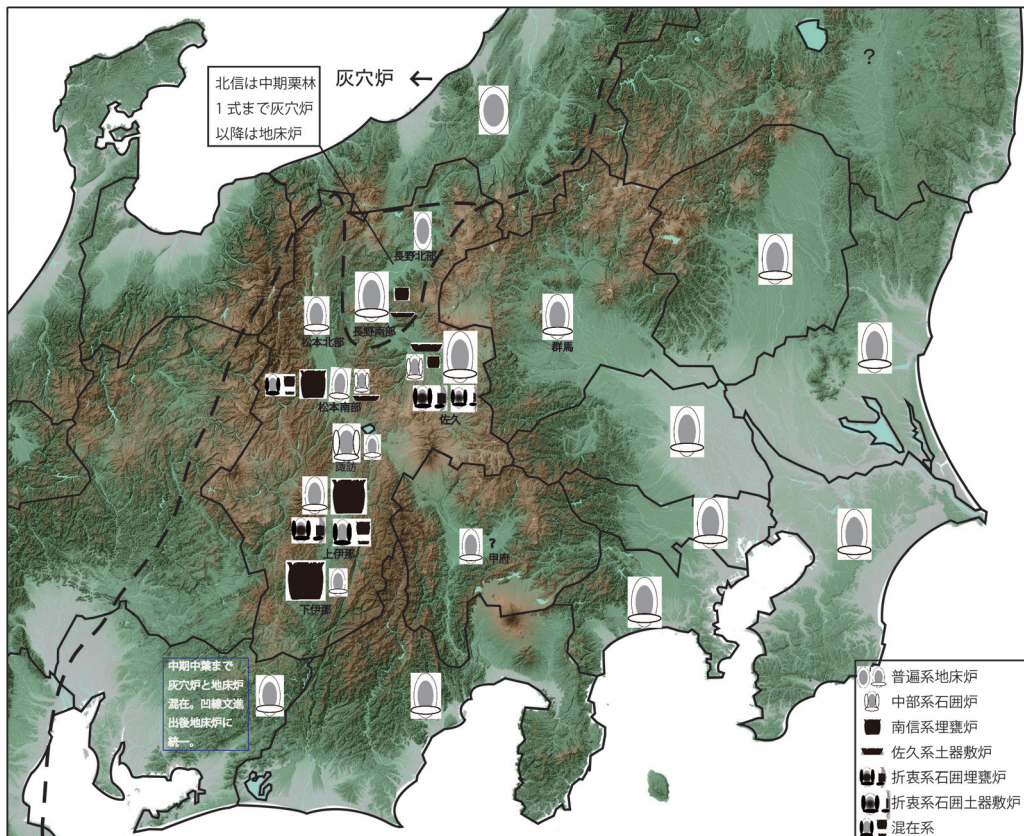


図2 弥生中期栗林2式新～3式段階の炉の分布